

視標「米大リーグ大谷、山本の偉業」

歴史刻み「メジャーの顔」 最高の評価、実績が証明

江戸川大教授 神田洋

2025・11・14

米大リーグ、ドジャースの大谷翔平が4度目のリーグ最優秀選手（MVP）に選出された。ナショナル・リーグ優勝決定シリーズ（NLCS）でもMVPになっており、ワールドシリーズではチームメートの山本由伸がMVPを獲得した。

過去の日本選手と比べ、2人が際立つのは、最高の評価を受け、その通りの力を示した点にある。

米国での報道が、成し遂げた意味を表している。3月にCBSスポーツが掲載したMVP予想で、記者6人のうち4人が大谷を予想した。シーズンMVPという最高の栄誉が当たり前のように期待され、期待通りの成績を上げた。

大谷は総額7億ドル（当時のレートで約1015億円）の契約でドジャースに移籍した。1年平均7千万ドルは史上最高だ。山本の総額3億2500万ドルの契約は、総額で投手として史上最高である。歴代最高額を大リーグでプレーする前に得た。

米国野球殿堂入りしたイチローでも大リーグ最高年俸に届いたことはない。田中将大が2014年に総額1億5500万ドルでヤンキースと契約したときも、当時投手最高額だったカーショー（ドジャース）の2億1500万ドルは遠かった。

大リーグという野球ビジネスの頂点で日本選手が史上最高の契約を手にしている。日本のマーケットという付加価値だけで最高額は提示されない。大リーグの顔という新たなレベルの期待がかけられているのだ。

大谷と山本の活躍を伝える記事には「proved（証明した）」「worth（価値がある）」などの言葉がよく使われ、最高額であることも常に付いて回る。

例えばCNNは電子版で「山本は驚異的な契約に見合う価値があることを証明しただけではない。金額では計れない価値を証明した」と短い文章の中でworthを1度、provedを2度使い、ワールドシリーズでの連投をたたえた。

米国でも話題が日本選手2人に集中しているのは、ポストシーズンでのプレーがまれに見る、いや前例のないレベルだったためでもある。

過去には09年ワールドシリーズでヤンキースの松井秀喜、13年アメリカン・リーグ優勝決定シリーズでレッドソックスの上原浩治がMVPとなった。ただ活躍そのものが「歴史的」と報じられたわけではなかった。

大谷はNLCS第4戦で投手として6回無失点、10奪三振を記録し、先頭打者弾を含む3本塁打を放った。スポーツ専門局ESPNのジェフ・パッサン記者は「この150年間に及

ぶ約 25 万試合の中で恐らく最高の個人プレー」と偉業を伝えた。大谷はワールドシリーズ第 3 戦では 2 本塁打を含む全 9 打席出塁という快記録も残した。

山本のワールドシリーズ 3 勝は、01 年のジョンソン（ダイヤモンドバックス）以来だった。第 6、7 戦の連投も、計 2 失点も同じで、投球回数は山本が 1/3 回多い。米国のファンにとって伝説の投手に肩を並べたインパクトは大きかった。

記者でスポーツ番組の司会も務めるレーチェル・ニコルズさんは「大谷はこのポストシーズンで史上最高の野球選手であることを証明し、山本はスポーツ界におけるスターの定義を塗り替えた。これが新たな基準だ」と投稿した。

× ×

かんだ・ひろし 1966 年東京都生まれ。米国で長く大リーグを取材。2017 年より現職。専門は米国スポーツジャーナリズム。